

平成29年度 第57回 長野県保育研究大会

10月21・22日 岡谷市で開催



発行所
(一社) 長野県保育連盟
長野市若里7-1-7
TEL026(228)4415
FAX026(228)9443
e-mail:kenhoren@khaki.plala.or.jp
http://horen-nagano.jp/
題字 海野会長

大・会・宣・言

昨日から二日間にわたり、第五十七回長野県保育研究大会が、「みんなが元気に輝く たくましまち」岡谷市において開催され、「すべての人が子どもと子育てに関わりを持つ社会の実現をめざして」という主題のもとに、県内の保育関係者が一堂に会し、保育環境を取り巻く様々なテーマについて真剣に研究協議を行いました。

「子ども・子育て支援新制度」は施行から二年が経過し、保育士等の処遇改善を中心として一定の拡充をみておりますが、近年〇歳から二歳児を中心に保育所利用児童数が増加しており、その結果、全国の待機児童数は三年連続で増加となっております。反面で保育の受け皿を増やす鍵ともなる保育士も全国的に人材不足の深刻さが増しており、併せて大きな社会問題となっております。

また、保育所保育指針の改定、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の改訂が行われ、来年度から適用されます。特に保育所保育指針は前回の改定から十年が経過し、保育所利用児童数の増加、子育て世帯の負担や孤立感の高まり、児童虐待相談件数の増加などの社会情勢を踏まえた改定となっております。私たち保育・子育て支援に携わる関係者は、指針改定の背景や趣旨、求められる役割、責務などをしっかりと理解するとともに、乳幼児の保育・教育の原点を見直し、養護と教育が一体となった保育の営みの大切さを広く社会にアピールしていくことが必要です。そして、未来に向かって無限に伸びる可能性を秘めた、すべての子どもたちの健やかな育ちを支え、併せて地域に豊かな子育て文化を根付かせていくために、創意と工夫に満ちた積極的な取り組みを続けていくことが強く期待されているところです。

この大会で行われた研究協議と、そこから得られた先駆的で効果的な実践の学びを踏まえて、子どもたちの安全と健やかな成長を願い、心豊かな次世代を築いていくという使命を達成するとともに、長野県全体の乳幼児期の保育・教育の質をより一層高めていくために、私たちは、更なる自己研鑽に努め、実践していくことをここに誓い、宣言します。

平成二十九年十月二十二日

第五十七回 長野県保育研究大会

保育功労者表彰

長野県保育連盟会長表彰

(敬称略)

上田市 中丸子保育園長

長坂 美江子

飯田市 飯田仏教保育園長

上郷なかよし保育園長

早川 英章

木曾町 日義保育園長

松原文江



八ヶ岳と諏訪湖が一望でき、鰻の美味しい岡谷市において十月二十一日(土)、二十二日(日)の両日合わせて約千五百人余りの参加者をお迎えし、第五十七回長野県保育研究大会が開催されました。昭和三十九年第四回以来の岡谷市の開催となりました。二日間の会場移動等、当日は衆議院選挙や台風の接近等もある中で、大勢に参加していただき、ご不便をお掛けしたと思いますが、実り多い研究大会になるよう、実行委員一同一丸となり、できる限りのことをして準備を進めてまいりました。

一日目は、神明小学校を会場に「すべての人が子どもと子育てに関わりを持つ社会の実現をめざして」をテーマに、特別分科会を含む、十七分科会による研究レポートの発表が行われ、限られた時間ではありましたが、共に学び合う事ができました。今年度は可能な限り希望の分科会に参加できるようにした為、手狭の分科会もありましたが、その分実り多かったですと思います。

二日目は岡谷の四季折々の魅力や特色ある保育を映像によりご紹介させていただき、研究発表では「よく考え、自ら行動できる

子どもを目指して「食べ物を話題にする子ども」と題して、当市が、平成十八年度から取り組んできた、ぼくもわたしもおかやつこ事業やキッズエプロン隊事業などを中心に、子どもの思いの受け止め方やくみ取り、経験の積み重ね、やりたいと思える環境づく

「保育研究大会を終えて」

元気にたくましい子に育つために

岡谷市保育研究大会実行委員会
副実行委員長 加藤 麗

りなど、保護者との連携を大切にしながら、自ら行動できる子どもの成長の姿を発表させていただきました。

続いての記念講演では、「環境構成の理論と実践」保育の専門性に基いて」と題して、高山静子先生によるご講演をいただきました。

た。具体的な映像を通して、子どもの発想や発達に合った環境を考え、子どもが主体的・自律的に生活する環境の中で、自己肯定感を高められるよう努めていかなければならないと気づくことのできる大変有意義な講演となりました。今大会を受けるに当たり、不安な事も多く、至らない点多々あったかと思いますが、長野県保育連盟事務局を始め、関係者の皆様方に支えられ、協力をいただきましたが、大会を開催する事ができました事に、心より感謝申し上げます。

私達はこの大会を通して保育士同士の絆の深まりを感じながら、貴重な経験をこれからの保育所運営や質の向上に活かしていきたいと思っております。

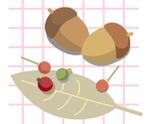
今後ともこの研究大会が、保育士の資質向上と自己研鑽の場として、共に学び、語り合い、実り多い大会となりますようご祈念申し上げます。お礼の挨拶とさせていただきます。

本当にありがとうございます。どうぞよろしくお願いいたします。

岡谷市食育キャラクター



分科会



第1分科会

0、1歳児保育の実践

参加者 四十二名

●研究協議の概要

改訂保育指針の「愛情豊かに応答的に行われる保育の重要性」を踏まえ

○未満児保育の中で、どのような事を大事にしなが、個々の発達を促す環境づくりに取り組んでいるか。

○好きな遊びを通して成長するために、保育士はどのように子ども達の姿を見取り関わっていったらよいか。

●協議のまとめ

・一方的におもちゃを与えるだけでなく、子どもたちが主体的に遊べるように、自分で遊具を選べるような環境設定しておくことが大切。
・保育士の専門性を生かし「何を育てたいか」「そのためにはどうすればいいのか」というねらいを明確にして、手作りの遊具など有効に使い、手立てを考えていくことが必要。

・0、1歳児は月齢差が大きく個々の発達に差があるので、子どもたち一人一人の姿を見取り、成長・

発達を促す働きかけをしていく事が重要。

・意図していない場面でも、子ども達の成長が見られることは多々ある。いつも「子どもから学ぶ」という姿勢を忘れないようにしたい。

●助言者より

平成30年度から保育指針の改訂ポイントである乳児保育の発達の特徴を踏まえ、養護を中心とした環境構成に重点を置いた発表となった。

私たち保育士は①身体的発達 ②社会的発達 ③精神的発達 に視点を置き身近なものに関わり、感性が育つようにねらいや内容を考えるのが役割である。そのために複数の職員

の協働・協力で支援を行うことが大切である。子ども達に「○○をできるようにさせる」のではなく、「何をしようとしているのか」「何をしたいか」をよく観察し、保育士主導型でなく子ども主体に環境構成を考

える事こそが、子どもの最善の利益と個々の発達の保障を促すことになる。環境とは、人・物・時間の空間の保障である。発達の保障とは、生育歴、家庭環境を理解し保育指針の発達過程とあわせ見ることである。そのために保育士は今、高い専門的知識と技術と実践力が求められる。こう考えると環境とは身近

なところであり、一人ひとりのペースに合わせる事が大切である。

さてレポート作成については園の研究目的に沿ったものであり、参加者に「見える化」することが必要である。発表のためのレポートづくりにならないようにし、参加者がより良い学びの場となることに期待し保育の質を高めていただきたい。

『乳児は環境に一番敏感な「人」である。』

第2分科会

2歳児保育の実践～自我の受けとめ

参加者 四十名

●研究協議の概要

柱1・自我の芽生えてきた子ども
の気持ちを受けとめながら、遊びや生活のルールを伝えていくためにはどのような方法や言葉かけがよいか。
柱2・子ども達が主体的に過ごすための環境設定や保育士の関わりはどうあったらよいか。

●協議のまとめ

柱1について

○まずは信頼関係の構築を図る。
○子どもの姿について、職員が共通理解を持ち、見守ったり支援したりする。

○大人のルールを押しつせず、「○○ちゃん、どうしたいの」と、子

どもの思いに寄り添う事が大切。

○保育士が余裕を持って子どもに接する。すぐに指示してしまうのではなく、子どもを信じ、見守る姿勢が大切である。

○危険なことに対しては、あらかじめ伝え、安全に遊べるようにする。

○次の活動への見通しや期待が持てるような言葉かけや視覚支援をする。
柱2について

○絵や写真で指示すると保育者の声
がけも減り、子ども自身で考えて行動することができる。先の見通しもつくので、落ち着いて過ごせる。

○ダンボール、新聞紙などの素材でイメージが広がり、見たて遊びが始まる。子どもの興味にあった自然物、廃材などの素材選びが大切。

○保育士も環境の一つ。この子にとって何がよいか、保育士の都合でやっていないかと振り返ることが大切。子どもの育ちをみて、環境を変えていく。

●助言者より

○子どもの行動そのものに目を奪われず、行動の原因を理解する。

○5つのアプローチ(星山氏)①心の支援②愛着、信頼関係、自尊感情③発達論による支援④一つのことができるようになる↓易しい問題の積み重ねの結果⑤行動への

支援・問題行動には必ず理由がある。適切な行動を伝えるポイント『CCQ』。気持ちを穏やかにして(Calm)、子どもに近づいて(Chase)、声のトーンを抑えて(Quiet) ④環境調整による支援・視覚支援など ⑤周囲の人の連携による支援・縦のつながりが大切↓年度が変わっても支援を引き継ぐ。

○余計な声かけや先回り保育に気を付け、子どもの力を信じて見守る。

第3分科会

3 歳児保育の実践・他者への気づき

参加者 九十八名

●研究協議の概要

一、遊びを、豊かな感性と想像力を膨らませながら展開していくための環境構成はどうあったらよいか。
二、友だちと関わる力を育てるための環境援助はどうあったらよいか。

●協議のまとめ

- ・遊びに必要な小道具を充実させ、置き場所や順番等子どもと一緒に考え、主体的に遊びこめるようにする。
- ・友だちの存在も環境の一つととらえ、友だちの姿が素敵と感じたり、真似たりすることから友だちの存在を意識してかわりが広がっていく。
- ・遊びに入れない子がいるとき、保育士がその子とまず遊び、そこへ

周りの子を誘い入れて共感できるようにしていく。

- ・保育士の立場もまた環境であるのとらえ、いつも見ている・見守っている、の姿勢で子どもが安心して遊べるようにしていく。
- ・次の活動を楽しみにできる、またやりたいと思える意欲を育てる環境や言葉かけを意識する。

●助言者より

○3 歳児保育では、一人一人の遊びを大切にしながら、集団の遊びの楽しさを経験させていくようにする。それには一人一人が遊びたいと思える遊びや場所、遊び込める時間なども環境構成として大事に考えたい。

○3 歳児期には自己の拡大を十分にさせていきたい。一人一人が満たされ、安心感が持てるように、保育士が子どもの気持ちを十分に受けとめ、共感することが大事。

○3 歳児の遊びの特徴として、身近な人やものをよく見て模倣し、ごっこの世界を楽しむ姿がある。

二つのレポートは、ごっこ遊びが子ども主体に展開されるように、日常の子どもの遊びから、集団の遊びへと発展させた実践。

一つは、絵本の読み聞かせからイメージをふくらませて劇ごっこ

界を楽しみ、もう一つは身近な虫たちとのふれあいから、鬼ごっこへと子どもたち主体に発展させた。一人一人の遊びを十分にするとところから、一緒に遊び「楽しい」を共有しながら、友だち関係を豊かにするような保育を、環境を通して行っていきたい。

第4分科会

4、5 歳児保育の実践

～集団の中で育ち合う～

参加者 百三十六名

●研究協議の概要

○討議の柱

～体験を通して集団の中で共に育ちあうための保育士の関わりと環境構成はどうあったらよいか～

・絵本でイメージを共有しテーマを持つて遊ぶ楽しさがある。活動を焦点化していく。

・友達に認められると成長や変化が見られる。保育士が子どもの良さをいいタイミングで認める事も、人的環境である。集団の良さは個を大切にすることで生まれる。

・遊びも次年度への繋がりと広がると広がる。異動があると難しいが、職員間で密に連絡を取り繋げ、子どもの見方を深めたい。

・保育士がきっかけを作り、子どものアイデアや発想を活かす活動を

行いたい。

- ・うまくいく保育ばかりが良いのではなく、トラブルがあるからこそ育つ、時には見守る事も必要。
- ・LPDCAサイクルで展開することで、子どもの深いみとりができる。

●助言者より

・遊びの満足感があると子どもから遊びの終末が迎えられる。
・子ども達の気付きや成長を読み解く目が必要。好きな遊びは、得意なことであり、好きな遊びをして楽しいという思いは、自己肯定感となる。

・子どもの主体性は、自主性+活力性《子どものエネルギー》である。活力の元を環境の中へ入れる。主体性と活力を結ぶのは、保育士が一緒に遊ぶ、関わりの対等性と、素材誘導性である。

・子どもの主体性は、安心感が持てる環境構成の中で作られる。養護の部分がないと教育は来ない。
・活動を「広げる」「深める」という視点を持つ。保育者は子どもの行動を予測して空間を作り、遊びの見通しを持つ。

・一人一人が全く違う個性を持って生きている。個性が出会い化学反応を起す。違っているからこそ互いに影響しあい豊かな育ちがある。

・「主体的な遊び」は、主体的な保育を保証される園の風土の醸成とともに可能となる。

第5分科会

異年齢保育の実践

〜継続性のある異年齢の関わり〜

参加者 四十三名

●研究協議の概要

○異年齢交流を通してどのような子どもがみられるか。人と関わる力を育てるための異年齢交流の環境や援助・配慮はどうあったらよいか。

○継続性のある異年齢の関わりをするためにどのような取り組みをしているか。

●協議のまとめ

○園の規模や環境によって、異年齢交流の仕方は違うが、それぞれの園で工夫しながら取り組んでいる。

○以上児のみでなく、未満児と、または小学生との交流など様々な人と関わることで人と関わる力を育むことができないのではないだろうか。

○ペア作りへの配慮など、課題はあるが、保育士が連携をとりあい共通の思いで保育をすること、L P D C A サイクルで保育をすることが、子どもの育ちにつながり、異年齢交流も継続することができる。

○家庭にも異年齢交流の意義や異年齢交流を通して成長している子どもの姿について知らせていきたい。

●助言者より

○異年齢交流、縦割り保育、集団保育のねらいを明確にする。

日常的に異年齢保育、縦割り保育を行っている園は、子どもの成長を願って保育形態を工夫している。異年齢という交流の形を優先するのではなく、異年齢交流のねらいや考え方を園で共通認識して取り組むことを大切にしたい。

○子どもの人間関係の力を育てる。

保育士同士が気持ちの通じた一体感のある保育をしていく姿を子どもたちが見たり感じたりする、保育士と子どもとの思いやりが行き来する毎日を過ごしていることが基本である。人間関係を体験する、感じる、葛藤する等の経験をしていくことが人と関わる力を育てていく。

○思いやりの心

子どもの持ち味によって、同じ行為でも思いやりの感じ方に差がある。日々の子どもの姿を捉えて子どもの理解を図った上で、相手の立場に立って考えられるように援助していく。

第6分科会

障がいのある子どもない子ども共に育つ保育

参加人数 四十五名

●研究協議の概要

○安心できる環境と共に育ちあう集団作りを考える

○園全体で共有した情報を生かした支援と連携の手だてを学び合う

●協議のまとめ

○子どもたちが安心できる環境を作るために、一人一人の発達や特性に合わせた手だてを探る。視覚支援（絵カード、表情カード、タイムタイマーなど）は子どもが見通しを持つための支援として有効である。

○子どもたちが共に育ちあう集団作りの手だてを考える。みんなが迷わない同じ生活の流れを作る。どの子どもやりたいと思えるあそびを充実させる保育を組み立てていく。クラス集団が落ち着くと、障がいのある子ども落ち着いて過ごせるようになる。

○配慮が必要な子の好きなあそびを主活動に取り入れ、あそびを発展させていくと、友だちとの関わりが増える。あそびの発展に見通しをもち、タイミングよく保材を出す。あそびが魅力的であれば、子

ども自身が集団に戻り、主体的にあそびを進めていくようになる。

○支援シートを活用し、職員間で子どもの姿や支援方法を共通理解すると、統一した支援につながり連携した保育ができる。

●助言者より

○一人一人の特性に合わせて、刺激を減らし、その子にとって必要な物を残す環境が大切である。

○支援児がクラスの中で認められ、よいところ苦手なことを理解し、支える意識が持てると、共に育ち合うクラス集団作りができていく。

○子どもが変われば保護者が変わる。保護者が変われば子どもが変わる。保護者の性格、生活環境を知り、信頼関係を築くことで、医療機関へつなげるチャンスが生まれる。

○診断名ではなく、その子自身をしっかり見て知り、支援方法を探っていくことが大切である。



第7分科会

配慮を必要とする子どもの

家庭や関係機関との連携

参加者 四十三名

●研究協議の概要

○家庭との連携について

○保護者への伝え方・寄り添い方・共通理解ができていくか・行事への参加の仕方等保護者支援をどの様に考えているか。

○関連機関との連携について、どのような機関との連携があり、活用しているか。

●協議のまとめ

- ・保護者への伝え方は良い事を伝えるだけでなく、言葉に気を付けながら、事実を伝えていくようにする。
- ・保護者の気持ちに寄り添うよう心掛け、信頼関係を築き、保護者が納得することにより様々な機関への相談につなげることが出来る。
- ・家庭内において、子どもに対する困り感の受け止め方が違う場合は、保育士のフォローが大切となる。
- ・他の子どもとの関わりや子どものありのままの姿を知ってもらうために参加型保育（保育ママ等）を設けている。
- ・関連機関との連携には支援シートやハビリノート等があると園・家

庭・病院との共通理解ができる。無い所では専門機関との連携が取りにくい。

・保育士からは伝わりにくいことも専門機関の医師・ST・OT等から適切に言われることで保護者に受け入れられたりする。

・自治体により支援の体制に差がある。5歳児相談・4歳児プログラムがあり教育委員会の訪問等体制がしっかり整っている所もある。

・通院や関係機関に対して保護者の抵抗感や偏見がみられる場合もある。偏見を解くためには、その子の発達にとり、相談機関は良い所、育ちに必要な場であることをアピールしていく事が大切である。

●助言者より

- ・子どもを中心に保護者、園職員、専門機関、地域等がよく連携をとり、幼児期から小、中、高校を通し、社会人につながる育ちをつなげていく。
- ・アセスメントシート等を活用し、子どもの姿の共通理解を図りながら、それぞれの専門機関の特性を理解し、連携をとっていく。
- ・小学校への移行は子どもや保護者にとり、大きな転換期となる。情報引継ぎに努め、安心して移行できるようにする。

第8分科会

職員の資質向上のための園内研修

参加者 三十九名

●研究協議の概要

○共通意識をどのように持ち、研修をどう積み上げているか。

○研修をどのように、子どもの育ちにつなげているか。

○園内研修により、保育士や子どもが変わったと実感できた事例。

●協議のまとめ

○研修報告は、復命書、記録ノート、職員会時を利用して全職員に伝えるようにしている。

○研修の方法として、十五分解決法のように短い時間で意見を出し合ったり、少人数でのグループ討議、付箋の利用、ロールプレー形式などで意見を出しやすいように工夫している。

○意見がぶつかったりお互い譲れない時、子どもにとつてどうか、子どものなを育てたいのかに立ち返って、思いを出し合う。いろいろな思い、考えを知ることが大事で、それが資質向上につながるのではないか。

○自分から発信することで悩みや問題を保育士間で共有でき、連帯感

や仲間意識が高まる。いろいろな先生から、アドバイスをもらえるので、いろいろな方法を試すことができる。又、共通理解をすることで対応の仕方や子どもの見取り方などが統一され、子どものトラブルも減ったように思う。

○保育士の意識が変わったことで子どもの姿も変わる。その変化が、保育士のやりがい・意欲・自信につながり、保育の質も高まる。

●助言者より

○各レポートへの評価を通して
 ・新指針に基づき、環境構成などについて園内研究が進められている。
 ・記憶は忘れるが、記録は残る。子どものつぶやき、姿などを記録として残していく。
 ・研究保育やお互いの保育を見合うなど保育士同士の学び合いが大切である。

・資質向上のための意識改革。自己評価の具体的な観点として指導案に『評価』を取り入れる。毎日の保育は、これで良いのか？自分に問いかけること。そして、それに向けて討議することが大切である。

○私達は、子どもたちから『あこがれの人、あこがれの職業』でありたい。

第9分科会

職員のチームワーク向上への取り組み

参加者 四十名

●研究協議の概要とまとめ

一 保護者・職員の連携について

○保護者との連携

・子どもが成長している姿を丁寧に伝えていくために、保護者との関わりは重要である。日々の連絡帳だけでなく、保護者と直接話すことも大切である。

・保護者に園での子どもの活動の様子を知ってもらうため、参加保育をしたり、写真で掲示をするなどの取り組みをしている。

・子ども達との信頼関係ができる事で、保護者との信頼関係が築き、子ども達をより良い支援で見守っていく事が出来る。

○職員の連携

・職員条件や体制が違う中、皆が同じ保育観で保育をしていくことは難しい。職員会や事例会議等で悩みを共有することが大切である。共有することで子どもが見取りができる。

・相手を知ることや相手に自分を知ってもらうことも連携につながる。保育士自身が『保育が楽しい』と思えることが大切である。

二 保育士の資質向上について

○園内研修や園内での公開保育・事例検討会・研修報告会・保育指針や保育書の読み合わせ等、各園で資質向上のため、様々な取り組みをしている。

○人権チェックリストで自分をチェックすると良い。価値観の違いはあるが、どんな立場でもスキルは一緒であることが大切である。

●助言者より

○日常保育が高まり他の先生との連携・共有が出来ているレポートであった。エピソード記録を作るのが良い。子どもを育てるにも時間が必要であり、日常の積み重ねも大切である。どのように成長を見守っていくか課題をもって取り組んでいく必要がある。

○職員との連携では、過去の経験の中でつかんで来たものを変えるのは難しい。年代による保育感の違いもあるため、向上していくためには同僚性を発揮していく必要がある。

○担任が一人で責任をもってやるのではなく、園全体でやらないと動いていれない。

○思考力・判断力を生かした保育をしていくことが大切である。

第10分科会

保育所機能や保育士の専門性を活かした地域の子育て家庭支援

参加者 三十九名

●研究協議の概要

○地域の子育て家庭(未就園児)に開かれた保育園にするためにはどのような工夫があるか

○園児の保護者が安心して子育てできるように、どう支援したらよいか

●協議のまとめ

○園開放をするにあたり、チラシ配布等の情報発信、イベントや参加しやすい行事を取り入れる、在園児との交流等様々な工夫をしている。

○園開放で親子の様子をチェックする。コミュニケーションがとれない親だと子どももとれない様子が見られる。来園しない親子の情報をどうキャッチするか。本当の意味で支援が必要。他機関との協力が大切。

○保護者とは日々のコミュニケーションが大切。連絡ノートやおたより個別懇談・保育参加等で園の様子を知ってもらう。クラス懇談での情報交換も有意義である。

○どこまでが支援か。感染症の疑いがあっても登園させる等気になる状況もある。親の思いを一旦受け止め理解を得ていく必要がある。

○自分から話せない保護者はどう支援につなげるか。連絡ノートの書き方の工夫をしたり、目や表情で観察しながら声掛けしている。

○親にとって子どもの成長はうれしいことなので進んで伝え、一緒に育てていくことが大切である。

●助言者より

○レポートからは、子育てに悩む親と子に寄り添い、しっかりアクセスメントし、プランを立てて取り組んでいる様子がうかがえる。また、未就園児親子に来園しやすい環境を作り園開放の情報発信を工夫したり、アンケートの実施等多忙な業務の傍ら丁寧な実践ができています。

○支援の必要さが表に現れてくる親子は良いが、家から出られない等「子育て支援のニーズが高い人へのアプローチをどうしていくか」が今後の課題となる。援助を欲しないが必要な方をアンテナを張ってキャッチしていくことを、民生委員等地域の方との連携の下、保育園が担う責任は大きく、課題となる。

○支援をしていく上でいろいろな出会い、ケースにぶつかるが、それに対応する保育士の心の安定、健康維持に努めていただき求められるニーズへの対応力を付けてほしい。

第11分科会

食習慣形成と食を通じた保育実践

参加者 四十一名

●研究協議の概要

- 一、保育園としてできる保護者との共通理解に必要なこと。
- 二、保護者も巻き込んだ園での食育活動・食育計画や発信の仕方は。
- 三、保育士と調理員との連携で大切にするとは何か。

●協議のまとめ

- 一、保護者に園での活動を園便り等で伝え、啓発する。保護者と対話を多くし、連絡帳も活用する。保護者が関心を示さないことも繰り返し根気よく伝えていく。
- 二、参加型保育、試食会、親子クッキングなどを行い保護者も巻き込む。子どもの姿を見てもらう機会を作り、関心を持ってもらう。保護者が協力し関心を持ってくれたことなども認めていく。献立てといっしょにメニュー紹介をする。
- 三、職員会などでも必ず給食の話題を取り入れる。調理員も子どもといっしょに給食を食べ、職員の共通理解をする。保育士、調理員、保育キーパーなど違う立場の職員で話し合いを持ち、連携をする。

●助言者より

○食への意欲を育てるには、どのようなことが必要であろうか。一人一人への寄り添った対応により、子どもがどう変化していくのか、どちらの発表も具体的に述べられていたと思う。

○波田ひがし保育園では、食の基本を培うべき乳幼児期の食事のあり方を子どもが意欲や興味を持って楽しく食べられるように、保育士と調理員とが一体になり、なお保護者への連携も図りながら、食育の基本についての研究がなされた点が評価される。3人の気になる子どもへの働きかけも、主体的に食べることに着目し、手だて・ねらい共に一人一人に寄り添った内容といえる。食への意欲が育つたためには、この結果をふまえて、どのようにすれば自主的に楽しく食べる意欲が育つのか、今後の課題として進めてほしい。

○赤穂保育園では、給食室との関わりをもとに、五感に訴える活動がより子どもへの配慮がなされていたと思う。お料理3点セットを保護者に用意してもらい、安全な使い方の習得という違った切り口に食育への意識が変化してきた。クッキングのみではなく栽培などとの連続した食育を今後も期待する。

第12分科会

家庭や地域との連携による食育の進め

参加者 四十一名

●協議のまとめ

- 未就園児の保護者には試食会等を開き、実際に食事をしている所を見ることで、気づくことがある。
- 保護者への伝え方、連携の仕方が難しいが保育参加をすることで、子どもの食べる量、食べ方、保育士の言葉がけ等参考になるのではないか。
- 行事食について、地域のお年寄りから話を聞いたり、ボランティアの人に入ってもらったりして知識を広げていくことが大切。
- 子どもの活動を通して子どもが考え、主体となる食育活動を進めることが大切。
- 子どもに何を経験させるか、目的を考えながら地域の人との関わりを広げていく。
- 地域とつながることは、地域に大切にされているということ。感謝の場を作っていくことが大切。
- 保育士の「おいしいね」「よく食べたね」「すごいね」の一言が食育にもなる。

●助言者より

○子どもが好き嫌いなく食べること

に視点が置かれているが、幼児期の食育のねらいは、心で感じること、やろうとする気持ち、心構えなど、いろいろな体験を通じて、行動や習慣が定着していく。

○子どもの発達に応じた遊びを保育の中で実施することが大切。何かをさせるのではなく、環境を通じてどんなことを体験し、その中で子どもは何を学んだのか、気づき、感じて、どんなチカラが身についたのか、保育の視点が重要。

○地域の方に畑を手伝ってもらい、何かをいただくことがあるが、発達の中で、どう感謝したら良いのかを子どもたちと話し合うことも大切。

○子どもたちも給食の先生、園長先生と一緒に給食を食べることが大切。

○保育所の特性を理解し、活用して、保護者のみならず地域の子育ての発信拠点として、食に関する支援を行ってもらいたい。

第13分科会

小学校との連携とのあり方

参加者 四十二名

●研究協議の概要

- 協議の柱を立て考え合う。
- ・子どもの育ちの連続性を保障するために、保育園と小学校の連携を

深めるためには、どのようにしていったらよいか。

・ 個や集団の「主体性」や「自信」を育てるための交流は、どのように進めていったらよいか。
・ 気がかりな子の就学に向けて支援と連携について。

●協議のまとめ

- ・ 子どもたちの発想を大切にしながら運動会を進めることにより子ども達も充実した活動につながり、日々認められ自信につながり、運動会を通して共同性が育った。
- ・ 小学校との隣接園や学校の近い園もあれば歩いて三十分の地域もある。それぞれ違った環境の中で小学校との連携に取り組んでいる。
- ・ 数年間の園生活の中で成功体験を積むことにより肯定感に繋がるのではないか。
- ・ 支援が必要な子には、事前に学校参観をさせてもらうことで安心できた。
- ・ 学校側だけでなく保育園からも発信していくことが大切であると感じた。

●助言者より

・ 園と学校が、方向性を同じにして保育をしていくこそが、意欲的に小学校生活を送るために、必要な連携である。

〈レポートに関わって〉

- ① 様々な生活場面で子ども同士の話し合いの場を多く取り入れ思いを伝えることや相手の思いを聞くことを大切にしたい。その中で意見の食い違いに耳を傾け、友だちの思いに気づけるようになり友だち同士の関わり合いの中で自己発揮となりお互いの育ちに繋がった。
- ② 必要な環境を整え、子ども主体でその時しかできない体験をしていくことが大切である。一人一人の思いや考えが遊びの中で生かされ、認められる経験が喜びとなり、相手のことを考える気持ちへと繋がっていく。
- ③ 学校探検したことで、小学校に関心、疑問など引き出すことができ、小学校に親しみを持つことができた。
- ④ 交流を重ねる中で、お互いの子どもの姿に合わせた交流ができた。
- ⑤ 保育園からお願いをし交流していく中で小学校から交流依頼があり相互に交流が出来た。

〈連携について〉

今の保育を着実に進めていって欲しい。0歳児から6歳児まで子どもたちが主体的に自信を持っていたら良いので、その成長のバトンを小学校へ渡すことが大切。

第14分科会

子育て不安や児童虐待に対する支援

参加人数 四十一名

●研究協議の概要

- 子育てに不安や苦手意識を持つ保護者に対しての対応や支援の仕方はどのようにしていったらよいか。
- 職員間で共通認識を持つなど取り組みの中で気を付けていることはどんなことか。

●協議のまとめ

- ・ 保護者側の受け皿がないうちに、保育士の思いだけ伝えても負担を与えるばかりでうまくは伝わらない。保護者の思いに寄り添い、子どもの姿を具体的に丁寧に伝える中で信頼関係を築いていく。
- ・ 上から言うのではなく「保護者を支える」「一緒に歩む」という意識で、保護者が自己決定できるような支援を心がける。
- ・ 勤務体制が多様化し職員間で共通認識を持つことが難しくなっている。職員会・園内研修だけでなくパート会や学年会など情報共有の場を意識して作っていく。また、お互いに言い合える職員関係であることが大切。
- ・ 虐待の中でも精神的な虐待は対応が難しい。

●助言者より

- ・ 保護者の心情について深読みしすぎない。
- ・ 保護者の思いに寄り添い、その伝えるタイミングを考えながら、今、伝えるか、後にするか、どこまで伝えるかで逡巡することが度々あると思うが、伝えるべき事実は伝え方がよい。今、保護者に伝えても無駄、若しくは反感を買うだけ、または、落ち込ませてしまうと、深読みしすぎないことが肝要である。その子が小学生になるまで待つ必要は無い。今伝えて反感を買われても、それを含めて受け止める姿勢と覚悟が必要である。保護者を落ち込ませても、フォローできる力量を持ちたい。
- ・ 保護者と信頼関係を結ぶことの難しさを自覚する。
- ・ 保護者によって生活背景が異なるし、保育士も各々の倫理観、価値観があるので、こうすれば信頼関係が結べるといふマニュアルは存在しない。第一に、難しさを自覚することが肝心である。その自覚があれば、工夫をするし、へこたれずにすむ。ここまでしてあげているのにという傲慢さも持たずにすむ。まず、難しさの自覚である。

第15分科会

地域社会に向けた保育所の取り組み
保育をいかに社会に発信するか

●研究協議の概要

○地域社会に向けた取り組みをどの
ように工夫し、発信しているか

○地域交流や情報発信を通して、子
どもの育ちに願うこと

●協議のまとめ

○地域を知り親しみの気持ちを持
ち、高齢者・未就園児・近隣の施設・
散歩で出会った人など小さな機会
も大切にしながら、各保育所の状
況により継続的な交流ができるよ
う工夫する。また、受け身でなく
積極的に交流し、発信していく。
○地域の人が気軽に、また主体的に
関わってくれるような雰囲気づく
りを大切にする。

○いろいろな世代の人と関わるこ
とで得られる安心感や認められ
る喜びが自信や自己肯定感の高
まりにつながりより良い育ちに
つながる。

●助言者より

○研究発表では、2つの園から地域
社会に向けた興味深い取り組み
の報告がなされた。一つは、29年
間続いている園児の祖父母から始
まった「ふれあい会」との交流。

もう一つは、4歳児が小学1年生
になるときに姉妹学級の6年生と
なる小学4年生との交流など、地
域の小中学生、JA青年部、未就
園児とその保護者他さまざまな人
との関わりを継続的に見通した取
り組みであった。

○その後の討議では、各園が行って
いるさまざまな具体的事例が話し
合われた。園の立地や規模など地
域性によって工夫された取り組み
が行われており、「保育」を社会
に発信する手立てについて論点が
深まった。

○小さなきっかけを捉えて関係を育
み継続していくことが、地域にお
ける豊かな保育環境の育成と子ど
もの育ちに繋がることが示され
た。また、継続していくためには、
誰もがたやすく関わること、日
常の保育に取り込んでいくこと、
地域の人が続けて自ら関わること
ができる環境を示すこと（雰囲気
づくり）の重要性が顕在化した。

○豊かな子どもの育ちに繋がる地域
社会との連携を実現するために
は、既に地域性や規模によって異
なる役割を果たしつつ行っている
取り組みを再評価し、日々発信し
続けていくことが大切であること
が確認された。

第16分科会

公立保育所・公立認定こども園等の
使命と地域社会での役割

参加者 三十八名

●研究協議の概要

○公立保育園の特性を生かし「地域
に愛され、期待される保育園を目
指して」

・地域の特性を生かした保育活動を
どのように行なっているか。
・保育園の役割についての確認と今
後の保育園が目指すべき方向につ
いて考える。

●協議のまとめ

・地域との交流を行なっているも、
単発的で受身になってしまふ。保
育園から情報発信し地域に返し
ていくことが継続的な交流に繋
がる。

・保育士が地域の良さを知り、地域
の人の知恵を子どもや保護者に伝
えていくために、どんな経験をし
てもらいたいかねらいと共に地域
交流を改善していく。

・地域と園・家庭を繋ぐものは子ど
も達である。子どもの視点をタ
イミングよく捉え活動に繋げてい
く、保育士の感性の豊かさが求め
られる。子どもの主体性を大切に、
地域交流を行っていく。

○『公立保育所アクションプラン』
策定後、公立保育所・認定こども
園等で、地域の社会資源として存
在する公立施設として、役割や機
能の充実を図る取り組みが行われ
てきている。今後とも内容を認識
し、地域の状況に応じ、必要な取
り組みを積極的にしていく必要が
ある。

○『公立保育所アクションプラン』
の具体的な取組として「①地域の
子育てニーズに即した公共サービ
スの実現②行政機関としてのネッ
トワークを活かし関係機関との連
携の強化③配慮を必要とする子ど
もの保育の充実④地域全体の保育
の資質・専門性の向上⑤地域住民
との協働・子育て文化の創造⑥保
育所等の果す役割の重要性や必要
性のアピール」等、公立保育所の
持つ特性を活かしながら保育実践
を深めていきたい。

○『子育てにすべての人が関わり、
関心をもつ社会づくり』は、子ど
もの人権が守られる地域社会を
つくること。保育所等も地域社
会の一部として、地域から何かを
してもらい、支えてもらうだけで
なく積極的に地域に出ていくこと
が、これからの公立保育所の目指
す方向の一つである。

特別分科会



管理部会

「保育所保育指針の改定を踏まえた保育のあり方を考える」

参加者 五十二名

新しい保育所保育指針の施行まで半年を切りました。園として、どのような視点から保育を計画し、反映させていくことが必要かなど、今回の改定について四名のパネラーの先生方から、それぞれの立場でお話をしていただきました。その後、七つのグループに分かれて、KJ法により「①課題を明確にする ②すぐに見えること」について、たくさん意見が出されました。

○保育現場の立場から

長野市塩崎保育園

園長 新谷 貴和

保育園ではたくさん課題を抱えています。家庭支援の必要なケースや気になる子どもも多くなってきましたが、未満児の増加、特に途中入所の希望が増えています。保育士が不足している中、時間外保育当番や書類、環境整備等に追われる毎日で、園長マネジメントが重要になります。

保育士の専門性を高めるために、

園内研修の持ち方にも工夫が必要です。若い先生たちがその良さを十分発揮し、自らスキルアップしようという気持ちを持てるよう援助していきたいと思っています。

○行政の立場から

長野県県民文化部 こども・家庭課

幼保連携推進員 風間 節子

各園で、人員及び研修時間の確保が厳しい現状の中、さまざまな機会をとらえて指針等を学び、保育実践や環境の工夫・改善に努力されていること、あるいは、保護者や地域の子育て支援の悩み等、分科会でひしひしと伝わってきました。

県も幼児教育の新基本計画の策定及び幼児教育支援センター設置検討、処遇改善に向けたキャリアアップ研修の実施等、保育士の資質向上を願い取り組んでいます。官民学の力を結集し、子どもの最善の利益を守りましょう。

○改定に関わった立場から

上田市(私) 秋和保育園

副園長 竹内 勝哉

新保育所保育指針の特徴は、幼児教育から学校教育への途切れの無い連続性と、積極的な「教育」の位置づけにあります。学びの本質・方向性としては、「環境を通しての学び」、「主

体的、対話的で、深い学び」であり、それを土台に三つの育みたい資質・能力・特に「学びに向かう力」を育んでいく必要があります。

普段、私たちは、指針の大切さは理解しているものの、保育に反映させることが難しい場面もあるでしょう。しかし、保育の質を確保するためにも、子どもの主体性を大切に保育を楽しみながら、専門性のある保育者を目指していく必要があります。

○養成校・助言者から

松本短期大学 幼児保育学科

講師 関 裕子

今回の改訂は、日本における保育の厳しい現状課題と、全ての教育の在り方を改革する一端となつています。なかでも、乳児保育の質を保障するために乳児保育の内容が手厚くなつていくこと、そして、保育園が制度的に幼児教育施設であると明記され、生きる力の基礎を育む場としての重要性と期待が示されていることに特徴があります。

まずは、指針を読み、養護を保障しているか、環境を通しての保育か、「今日の保育は、子どものどんな育ちに向かっているのか」目の前の子どもの姿と照らし合わせ、振り返っていただきたいものです。そして、指針

の内容を理解し、保護者や小学校、療育機関、行政等、社会全体に向けて、子どもの真の育ちとは何か、相手が納得のいくように解説力をつけ、専門職としての社会的な地位を高めたいことに繋がりたいものです。

保育の質は目に見えにくいと言われますが、徐々に子どもも主体、環境を通しての保育の実践園、地域が増えてきていると確信しています。質の根拠性は保育現場にある。その素晴らしさを知っているのは保育者です。

そしてその素晴らしさを説明できるようになった保育者は強くなる。専門性を相手に伝える術を知った保育者は、子どもの育ちを守るスキルを持ち、社会を変える力を持つのです。

また、養成校の教員は、保育魂を持つ学生育成を目指すと同時に、リカレント教育(保育士研修)や、県内保育現場における現状課題、保育の価値を研究、行政等社会へ発信する責務も担っていると考えます。

子どもを中心に、養成校と保育現場(臨床保育)、養成校と行政、保育現場と行政が響き合うことで、未来を創る『小さな市民』への理解者が増え、しくみが変わり保育学が確立されていく。それぞれ課題を抱えながらも、今できる工夫をしていきたいと思います。そこに、大きな意義があるのです。

よく考え、自ら行動できる子どもを目指して

～食べ物を話題にする子ども～

岡谷市主査会・研究発表係

<はじめに>

乳幼児期は生きる力の基礎が培われる時期であり、保育指針に示されている通り子どもが自発的、意欲的に関われるような環境を計画的に構成し、子どもの主体的な活動や子ども相互の関わりを大切に、生活や遊びを通して総合的に工夫しながら保育をする事が大切である。こうした捉えの中で、岡谷市公立保育園では、平成 18 年度より健康な生活の基本として「食を営む力」の育成を大切にしたいと考え保育の中で食育についての実践を積み重ねてきた。

<岡谷市共通の取り組み>

「ぼくもわたしもおかやっこ事業」

岡谷市の良さを幼児期から知って欲しいと願い、岡谷市の特産品を取り上げ活動を行ってきた。

わかさぎ

遡上見学、触れる体験を通して身近に感じることができた。

うなぎ

つかみ取りや目の前で蒲焼き見学など 味・香りなどの五感を使った体験ができ、より関心がもてた。

もろこし

農家の方と交流し、種まきから収穫・茎の片づけまで携われたことが次への期待へとつながった。

「キッズエプロン隊事業」

全園共通に子ども達に伝えたい食材を選び、豊かな実体験ができるよう食材に触れたり、栽培したりして各園クッキング保育に取り入れる。

ふき グリーンピース 夕顔 寒天

おいいただき
ありが豆(トゥ)



<研究からわかったこと>

1. 子どもの思いをくみ取ることの大切さ

子どもの思い・気づき・発見を大切に、保育士の言葉がけやかかわりのタイミングを工夫する。子どもの思いを繰り返し聞き、実現していくことで、気持ちが満たされていく。

2. 経験の積み重ねの大切さ

食の情報を発信し土台作りをしてきた。その上で、日々繰り返される経験や感動体験、失敗の積み重ねが自主的な活動へ繋がった。過程を大切にすることが子どもの成長となる。

3. 自らやってみたいと思える環境の大切さ

子どもが自ら「こうしてみよう」と考えた自発的な活動は、意欲的に取り組める。子どもの興味、何が楽しいかを見とること、見てわかる人的・物的環境・場の設定が大切。

4. 連携・見とりの大切さ

子どものつぶやき・ささやきを見逃さず、思いや興味を丁寧に受けとめる。連携が大切。

<終わりに>

五感を通して学ぶ経験や、「ぼくもわたしもおかやっこ事業」・「キッズエプロン隊事業」などを保育に取り入れていくことで、地域、地元の食材や食文化、安らぎのある郷土に親しみを持ち、子どもが大きく成長した時、心に残る財産になってくれる事を願いたい。

アンケート結果からも、「食育」が浸透してきている事がわかり、食育活動の充実・成果を感じる。今後も家庭との連携をとり、保育園からの情報発信を続けていき、子ども達に関わる職員が知識の向上に努め、各園の特色を生かした取り組みを続けていきたい。

記念講演

環境構成の理論と実践

—保育の「専門性」に基づいて—

東洋大学 高山 静子 先生



○保育環境の意義
保育環境には先生方の持つ願いや思いが園庭や保

育室に現れる。子どもたちにどんな経験やどんな暮らしをして欲しいと願っているのが現れる。又、子どもをどんな存在と捉えているか。子どもは幼稚で未熟で感性の鈍い子として捉えているのか。それとも大人よりも感性の鋭い存在ととらえているのか。そういった子ども感が保育の環境に現れる。そして、保護者を通して子ども感も伝わっていく。又、子どもの学習感・学びをどう捉えているか。子どもは、自ら探求し様々なことを学び取る有能な存在として捉えているのか。それとも大人がなにか教えてあげないと学べない存在と考えているのか、環境に現れる。

○保育者が思いを込めて作った保育室・園庭は、子どもたちが毎日見ている景色は、子どもたちの一生心に

残る原風景となる。

子どもが何を美しい、気持ちがいと感じ思考するようになるのか。一生の価値観にも影響を与えていくのが保育の環境。保育者は、子どもたちのまわりにどんなものを置こうか、おもちゃや木、遊具等、一つひとつ環境に心配りをしている。

○心の育ちと育ちにくい環境

子どもたちの心を育むものは、子どもたちが毎日どんなものを見て、聞いて、触っているか。子どもを取り巻く色や形、材質等環境の全てが毎日取り込まれて、心を形造っている。地域や家庭では人工的で強い刺激に囲まれ、テレビの文化や子どもたちをターゲットにした商業文化の中で育っている。本来子どもは身の回りのほんのわずかな物で様々な遊びを作り出すことができる人たちではない。しかし多くの大人はそれを知どこかに連れて行って何かを買い与

え美味しい物を買って大人と同じ物やサービスを消費したあそびを与えがちである。育児用品は進化しより便利になり、乳幼児期の発達に必要な経験ができにくくなっている。その為顔から転ぶ子どもが増えたり、ことばは、ゆっくりでなかなか出てこない子が増えている。

○園には子ども自身作り出す遊び、人との豊かな関わりが伴う遊び

園には、テレビの文化や商業の線を博した伝承する文化、子どもの文化、季節感があり丁寧な暮らしがある。子どもたちの育ちを守る最後の砦であり、子どもの暮らしや文化を家庭に伝える場でもある。園は家庭のモデル。保育者が質の高い保育をすれば子どもたちは家庭でもいい文化を得られる一番の子育て支援である。

○先生がもつ子ども感・保育感・あそび感・が保育の環境となり、保育の質を高める。

あそびをどう捉えるか。乳幼児期のおそびは、学習である。一般的には机に座わらせて子どもたちに何かをさせることを幼児教育と捉えがち。子どもの自発的なあそびの中で、

今伸びようとしている力を感じ取り、何度も何度も繰り返すことで獲得しようとしていると捉えているのがプロの眼差し。子どもは、何を体験しているのか学ぼうとしているのかをみとることが大事。

○環境の構成

子どもたちが主体的に活動を展開するように、ねらいを環境の中に埋め込んでいくこと。状況把握をし、あそびや生活の中で瞬間にねらいをたてている。時間や空間の環境を変えられることで子どもたちが自発的に活動できるように、豊かな遊びが展開できるように保育者が意図的に行うのが環境構成である。

◎昭和の保育者中心の指示保育から、変化する社会に柔軟に対応できる大人になるためには、子どもの頃から自分で自分を律して行動できる力を養っていく必要がある。又、状況に応じて変えていける保育者自身の力も大切。一人からでも環境は変えることができる。自分にできる所から、時間をかけて取り組んでみて下さい。

保育研究大会講評

長野県こども・家庭課 保育専門推進員 川上 真実

第五十七回長野県保育研究大会が岡谷市において県下各地から八百六十余名が集い開催されました。今大会は、平成三十年度から適用される保育所保育指針改訂の周知期間として、保育の社会的意義と役割、保育の実践等について討議を深めながら保育と教育の質を高めていく研究会になったと思います。

第一日目は、神明小学校を会場に研究討議が開かれました。第二日目は、岡谷市文化会館カノラホールにて開催地区の研究発表、式典、そして記念講演では東洋大学校講師の高山静子先生をお迎えして環境構成の理論と実践から保育の専門性についてご教授いただきました。開催地区の皆様が行き届いた準備と、心温まる対応が至るところに見られたとの声が聞かれました。

第一日目の研究討議は、特別分科会も含め全十七分科会に分かれて「全ての人が子どもと子育てに関わりを持つ社会の実現をめざして」という主題を基に、現在の保育の環境を取り巻く様々な研究テーマについて熱

心な討議が行われました。子どもを取り巻く社会問題を冷静に見つめた内容や、具体的な手立てや事例を挙げられた説得力のあるもの、着眼点が独創的なもの、保育所保育指針の改訂を意識したもの等、様々な観点からまとめられたレポートとなっていました。各分科会の担当司会者並びに発表者は、事前に助言の先生方と綿密な打ち合わせをして、ねらいと方向性を明確にし、当日は研究レポートからいくつかの討議の柱を中心に内容を深めていきました。参加者自身が持つ共通の課題と照らし合わせた質疑応答をする場面がみられ、事前学習をして課題意識を持ち積極的に臨む姿勢は、保育実践の具体的手立てとなり、より質の向上に繋がると感じました。

研修会で情報を共有することや、意見交換をすることは、それぞれが抱える課題や思いを客観的視点から自己研鑽する学びの場にもなります。そして研究討議を経ての気づきや考察、評価等は大切にしたい側面であると思います。習得した学びや、獲

得した知識を是非保育の実践で生かして頂きたいと思います。子どもの成長はそれぞれ異なり、何時どこでどう伸びるか分かりません。だからこそ私たち保育士は、子どもの力を引き出せる環境を保障し、子ども自身が主体的に行動できる姿を支援していく専門的知識を高めていかねばならないと思います。

第二日目は、岡谷市が平成十七年の食育基本法の制定以来取り組んでいる食育推進計画と連動した食育の研究についての活動として、食育研究委員会を設立し、継続してきた研究の経過を担当保育所が発表しました。子どもの実態を把握する為に、様々な取り組みを実施し、生きる力である健康的な生活をモットーに、指針で重要としている子どもの自発性と意欲を擦り合わせた「食を営む力」の育成を、総合的に工夫した計画を行い、特に、地域の方々の支援と連携の中で郷土食を取り入れ、食材に触れる体験ができることは、人との関わりを通し地域文化、命や健康の大切さ、人々への感謝の気持ち等、食を通して学んだことが後々子ども心の豊かな財産になると思います。幅広い学びを獲得している子どもの姿や心の育ちに寄り添う保育士の支援が大切です。

記念講演では、高山静子先生から「環境構成の理論と実践から保育の専門性に基ついで」を演題に、子どもの遊びを引き出す環境の大切さを骨組みとする環境の原則と、自由で柔軟な実践方法を、具体的エピソードを交えながら養護と教育面の総合的な学びとなりました。講義から見通しのある保育のねらいや方向性を持ち、子どもの発達過程に相応しい環境を構成していくことで、遊びの中から学びを獲得していく大切さを再確認しました。現在、子どもの発達過程に応じた温かい環境のあり方や手立てについて、様々な角度から研究を重ねている保育所も見られます。構成することが到達点でなく、構成していく過程を大切に、自由で柔軟な環境作りが必要です。

保育は現場が養成校の先生方と連携し、平成三十年度から適用される保育所保育指針に基づいた保育原理や実践の学びを深めていくことで共通の認識を持ち、より具体的に子どもを育ちを支えていける質の高い環境を作っていけることを願っています。

今大会、運営、実行にあたりご尽力いただきました、岡谷市の関係の皆様並びに実行委員会の皆様に感謝し、厚く御礼申し上げます。

第五十八回

関東ブロック保育研究大会に参加して

東筑摩郡麻績村 麻績保育園 箕浦 みあき

茨城県水戸市にて第五十八回関東ブロック保育研究大会が開催されました。

「すべての人が子どもと子育てに関わりを持つ社会の実現をめざして」の主題のもと研究討議が行われ、茨城県民文化センター大ホールには一、二〇〇名をこえる保育園関係者と主催側の役員やスタッフが集結しました。

初日は、まず厚生労働省雇用均等児童家庭局保育課長補佐加藤正嗣氏から「保育行政の動向と課題について」の説明がありました。その後、茨城県の山口副知事や水戸市の高橋市長からは、待機児童解消消化の対応に行政一丸となって取り組んでいる話がありました。

基調講演は、京都大学の鯨岡峻名誉教授から子ども心の動きを「接面」の概念を入れながら養護の働きと教育の働きをとらえる事を学ぶことができ、新保育指針と関わる重要な視点であることが分かりました。続いて薬師寺副執行長の大谷徹英師から「幸せの条件」という保育の現場で

は聞かれることのないお経の話や幸せのための四文字の話を伺いました。会場は最後まで心地よい緊張に包まれ、心温まる講話を拝聴しました。

二日目は、九分科会に分かれて意見発表、質疑応答が行われました。私は、「公立保育所・公立認定こども園等の使命と地域社会での役割」という第八分科会で意見発表をさせて頂きました。

「地域とのつながりを深め、心豊かになることを願って」というテーマで、地域社会全体で子育てを進める文化を築くために、保育園を拠点として世代を超えた交流の場を作り、未就園児や保護者の子育て支援に繋げていく為に活動してきた子ども達の様子を動画等で実践報告をさせて頂きました。

また、地域交流は人への感謝の気持ちやコミュニケーションの幅を広げるのに適した活動で、子ども達が地域の人の知恵や優しさに触れ、子ども達が大人になってからも次の世代に伝えるために、今後も継続し取り組んでいきたい願いを多くの先生方

に聞いて頂き、ご意見ご感想も頂くことができ貴重な体験となりました。他の二つのレポートもそれぞれ発表内容が異なり他県の特性を生かした取り組みを詳しく知ることが出来ました。

横浜社会福祉協議会保育研究会の発表では、民間保育所と公立保育所が、それぞれの役割を持ち保育施設全体の保育の質の向上に取り組んでおり、保育士自らが保育を振り返り、改めて基本の大切さが分かる等ハンドブックを活用している発表がありました。

静岡県の公立こども園では、小学校との連携の重要性から、カリキュラムや指導法を改善し、地域に根ざす公立こども園として、地域の歴史、文化を生かした保育の実践の取り組みの発表でした。

助言者の文教大学教授の櫻井慶一先生からは、研究の視点「特性を活かした取り組み方」の内容や進め方、また役割、運営上の課題について、それぞれの発表内容を簡潔に評価され、示唆していただきました。

後半は公立保育所の強みを生かした六つの「アクションプラン」について具体的な取り組みと、保育指針の重要ポイントと思われる「幼児期までに育ってほしい一〇項目の具体的

姿」についての話を聞くことができました。

この度の保育大会では長野県の保育士代表の一人として大きな使命と責任を感じ臨ませて頂きました。

この様な広域の保育大会においては各地域の抱える問題や課題が特色として顕著に現れ、対応も実に多様で大いに参考や刺激になる事項も多々ありました。

今回得られた経験や知識を今後の保育活動に活かし、よりよい保育環境の整備と保育の充実に繋げていきたいと思っております。

最後に、この様な貴重な経験をさせて頂き、又、御尽力くださいました関係各位の皆様にご心より感謝申し上げます。



身近な自然から学んだ保育

小諸市 中央保育園 園長 尾 芦 富 枝

中央保育園は、小諸市の市街地にあり町並みの中ですが、小学校や支援センターも近く、春には桜の花見、秋にはどんぐり拾いなど四季を感じられるところです。また、市の中心部にあり通勤にも便利で市内全域からご利用頂いています。

当園では、毎朝、年齢ごとに絵本の読み聞かせをしてから、皆で庭に出て体操をしています。そこで、季節の歌や童謡などを歌い、子ども達の歌声の響きわたる保育園・地域に根差す園をめざしています。地域の皆さんに、子ども達の歌声が届き、今では楽しみの一つとなっているようです。

今年度、各年齢が色々な生き物の飼育観察をしてきました。その取り組みを紹介します。

3歳児の子ども達は「はらぺこあおむし」の絵本が大好きで、何度も何度も読んでいました。保育士が「こんなに熱心な子ども達に本物を見せてあげたい」と話していると、職員が幼虫を見つけてきてくれました。「わあ〜

すごい」「大きい」「きれいだけど〜」と口々に驚きと嬉しさの3歳児。

毎日、絵本と見比べながら眺めていると、やがてさなぎになり、きれいなアゲハチョウになったのでした。そんな体験をもとに、運動会では「さなぎのきもち」というリズムになりました。神秘的な不思議な変化を優しく包み込むような子ども達でした。

4歳児は、オタマジャクシを飼いました。大きなトノサマガエルも見つけて飼っていました。カエルになったオタマジャクシは「何を食べるのか?」と図鑑で調べ、生きている虫しか食べないことを知り、皆で園庭の石をひっくり返して虫探し。そこで見つけたものはたくさんダンゴ虫でした。カエルはダンゴ虫を食べないことを知り、「ダンゴ虫すごい!」子ども達は、もっとダンゴ虫が好きななり、運動会では「すすめ!ダンゴ虫」のリズムを満足げにダンゴ虫になり切っていました。

5歳児は、カラスの部屋の窓から見える木々の間に巣を作り、カラス

のつがいが交互に卵を温め3羽のヒナが生まれるのが見えました。毎日子ども達は、3羽のヒナを眺め、母カラスと父カラスが一生懸命子ども達に餌を運んできているのを見ていました。大きな口を開けてせがむ3羽達に、何度も何度も餌を探しに行き、口移しで食べさせ親の姿を見て「お母さんとお父さん、赤ちゃんが大きくなるようにいっぱいご飯運んでいるんだね。」また、雨の日には、「カラス達、濡れて寒くないのかな?大丈夫かな?」と心配をしながら成長を楽しみにしてきました。日に日に、カラスの子ども達は大きくなり、羽を広げる姿が見え始めました。そして、5月最後の月曜日の朝、子ども達が登園してくると、カラスの親子の姿はもうありませんでした。突然の巣立ちでした。子ども達は、「え〜いなくなっちゃった」「さびしいな。でも飛べて良かった!」「また会いに来てくれるかな」



子ども達が、ヒナが飛べたことを喜んでいたことに、胸が熱くなりました。時折、園舎の屋根や木に5羽のカラスがやってきます。「あ、あのカラス達だよ」「会いに来たんだよね」と。そんなカラスの子育てを見ながら、子ども達は、図鑑を広げ鳥や動物に興味を持ち、「動物園を作ろう。」「どんな動物がいいかな?」「動物作りをして皆を呼ぼうよ。」と色々な遊びを工夫し異年齢の活動へと広がっていききました。組体操にも、動物ランドを取り入れ見事に動物を表現しました。

実際に目で見て触れた青虫のさなぎから蝶への変身、カエルの餌やりからダンゴ虫の凄さに感動し、カラスの子育てに自分を写し照らし合わせている子ども達から、飼育観察の経験の大切さを学びました。それは、言葉では言い表せない心の成長でもありました。

この経験から自分で実際に見て触れて感じたことを、さらに想像し工夫をして遊びに広がっていく力が育つたように感じます。そして、保育士も、子ども達の姿を見て、自然環境の大切さを学びました。これからも、子ども達と共に環境に興味や関心の持てる活動に取り組んでいきたいと思えます。

地域の中で共に育つ子どもたち

飯田市 慈光松尾保育園 主任保育士 伊藤 聡子

慈光松尾保育園は、平成二十二年に飯田市からの経営移管を受け八年目となりました。飯田市のほぼ中央部にあり、四季に彩られる雄大な赤石山脈を臨むことができます。天竜川の西岸に位置しています。園児数二四七名(未満児七二名、以上児一七五名)は、飯田市最大規模の保育園です。また、姉妹園として慈光保育園、認定こども園慈光幼稚園、飯田女子短期大学等があります。

当園では、「だめな子はひとりもない」とともに生き、ともに育ちあう」という保育理念を基盤に、一人一人をありのまま受け止め、子どもが自ら環境にかかわり伸びやかに自己を発揮する保育を目指して、保育にあたっています。

毎年、近隣の中学校の三年生(四クラス百四十名程)の技術・家庭科の授業での「保育体験」として四日間に分けて受け入れを行っています。お互いに大規模ではありませんが、中学生が二、四名ずつ、二歳児と三歳以上児のクラスに分かれて交流をすることで、ゆつくりと交流すること

が可能となりました。中学生が自己紹介をした後、各々選んできた絵本を数人のグループの子ども達に読んでくれます。お互いに緊張した雰囲気の中、ぎこちない読み方でも、中学生たちの一生懸命さに、子ども達も夢中になって聞いています。この時間を共有することで、心の距離がぐっと縮まり、その後は、ままごとや鬼ごっこといった遊びも自然な笑顔がこぼれ、一時間という交流時間はあっという間に過ぎてしまいます。中学生が帰る頃には、「もつと一緒に過ごしたい」という声が双方から出てきます。



小さい子どもと触れ合う体験は将来につながるものと願いながら、次世代育成の観点から地域の子どもの成長のお手伝いになればありがたいと思っています。園児にとつては、憧れと共に成長の喜びを大きく膨らませていく経験にして欲しいと思います。

また、地域の方にお世話になりながら、年長児は、「米づくり」を体験します。春は、れんげ畑となつている広い田んぼで花を摘んだり、鬼ごっこや相撲をとつて遊ばせてもらいます。田植えの直前に行う泥んこ体験は、裸足で入る初めての田んぼ。思うように動けないもどかしさと格闘しながらも、園庭での泥んこ遊びとは違う感触を全身で感じることで、田んぼと思ひ切り向き合うことができます。

田植え、稲刈り等の際には、自然の恵みに感謝しながら受け継がれてきた地域の風習を教えるもらいます。飯田市下伊那地区では、今では少なくなりましたが、実際に田植えをする田んぼをお神酒で清め、豊作を願い、黄金色の稲に見立てて「きなご飯」を食べる『おさなぶり』というならわしを聞きました。

苗の植え方や鎌を使つての稲刈りの仕方を教えてもらうだけではな

く、相手に刃を向けないという刃物の渡し方一つからも、人として大切なこともさりげなく教えて頂く貴重な機会となっています。

十一月の収穫祭、一月のどんど焼きには、お世話になつた地域の方を招待して、釜で炊飯したご飯と一緒に食べたり、一年の無病息災を願つてどんど焼きをした後、お手玉やかるたなどをして遊んでもらつたりと一年を通じた交流をしています。

他にも未就園児や小学生との交流、お年寄りとの交流もあり様々な世代の方との交流を通し、いのちの大切さ、地域の中で温かく見守られて育つていることを子どもと共に私たちが実感を持つことができます。これからも地域に根ざした信頼される保育園でありたいと思います。



どの子どもいきいきと保育園生活を送るために

子どもたちの将来のために私たちがするべきこと

松本市 のぼら保育園 主任保育士 松木里絵

松本市は平成の市町村合併で地域が大きく広がり、人口は24万人、公立保育園は43園、園児数は約4600名となりました。

今年度、加配保育士を必要とする園児は約230名。その他にもクラス支援保育士の必要なクラスが多くあります。どの園でも悩みとして挙がるのは、友だちとうまく関われない、集団での活動からはずれる、暴言や乱暴、わがままなど、対応の難しい子どもが増えているということ。個々の子どもへの対応一つ一つに困ったり、クラス運営がうまくいかず、多くの保育士が悩んでいる状況です。

その様な状況の中、保育園・幼稚園の主任研究会や保育研究協議会の班会では、7年ほど前より発達障害児への対応やクラスづくり、保護者対応などについて福岡寿先生の講演会を聞き学んできました。

また、松本市の保育課では、平成26年度より福岡先生に実際に保育を

見ていただき、カンファレンスを受ける方法で数園の取り組みを始め子どもが変わってくることを、そして保育士が変わることを実感しました。

平成28年度は、4園の実践園があまり、その研究会に主任保育士が分かれて参加し、学ぶ機会を持たせていただけることになりました。

福岡先生が、まずおっしゃったことは、「子どもの個々の事情に取り合わない」・「無用に手を出さない」ということ。この言葉を聞いて、初めほどの保育士も戸惑いました。今までの関わりを一から考え直すことになるからです。

福岡先生の著書を読んだり、カンファレンスを聞く中で、今の時代は「保育園では園児のふるまい」・「保育士は保育士のふるまい」が必要で、まずは、母体となるクラス集団をつくっていくことが大切なのだということが分かってきました。

「子供にかける言葉は、友だち関係の言葉でなく、役割言葉に徹する」

「毎日のルーティンは裏切らずに行う」・「子どもが困った時、不安な時に応えるようにする」など、保育のポイントも教えていただきました。

また、同時に「保育の内容は本気モードで取り組めるもの」・「お姉さん先生ではなく、子どもから尊敬される担任になる」・「担任はあそびを深めたり発展させるコーディネートをする」・「子どもたちの役割(手伝いを積極的に取り入れる」など保育の内容についても多くのご指導をいただきました。そして、加配保育士は黒子に徹し、担任の補佐をしたり、加配対象児とクラス全体の両方を見ながら適切に対応することを求められました。

ここまでクラスができてくると、子どもは精一杯自分の力を発揮し、本当に困った時に保育士を頼るようになります。そして担任は一人一人の姿がよく見えるようになります。どんなことが得意で、何に苦手意識があり、どう支援をすればその子がクラスの中で主体的に過ごせるのかが見えてきます。

福岡先生は、具体的なポイントで指導してくださるので、方法としてとても分かりやすいのですが、大切なのはやり方ではなく、「なぜその

対応をするのか」意味や願いを理解し実践することだと思います。

学んだことを意識して保育していると、今、自分がどのように動くべきか頭の中で考えて動くようになるので、保育士の動きも整理されてきます。「保育士は肉体労働ではなく、頭脳労働なのです。」と福岡先生もおっしゃっています。

自主的な生活を子ども自身ができるようになると、毎日がいきいきとします。「保育園に行けば楽しい事がある」・「このクラスの一人として役に立ちたい」・「明日もこれで仲間と遊ぼう！」と夢中になって遊び、自分の力を発揮して生活することこそが、豊かな感情や感性、人間関係、学びの芽を育てると思います。これが新指針で言われる非認知能力に繋がるのではないのでしょうか。

障害者の社会参加にもご尽力されている福岡先生のお話は、狭い視野で保育園時代だけを見がちな私たちに、子どもの将来まで見据えた保育の大切さを教えてくださいます。

保育士不足などが問題になっている保育現場ですが、感動や手応えを感じられる仕事に誇りを持ち、子どもと共に、いきいきと生活していきたいと思えます。

みんなで集い職員の質の向上を

須坂市 さかた山風の子保育園 園長 小林 庸高

須坂市内には、公立保育園十園と私立保育園五園の計十五園があります。須坂市では、老朽化した園舎の建て替えを進め、平成二十八年度までに終わりました。

こうした中で、職員の質の向上を目指そうと市内の保育園職員が集まり、年間計画を立てて、職員が互いに学びあい、交流してきました。

この間継続して取り組んできたこととしては、①保育士の担当年齢別研究会、②講師を招いての講演会・講習会、③体育指導、④施設や事業の視察研修、があります。

年齢別の活動については、各園での保育の取り組みを持ち寄り保育内容の向上を目的に行っています。ここ数年は、職員一人一人からアンケートをとり、どんなテーマで取り組んでいくかの参考にしています。それぞれの年齢ごとに、身体づくりについて、食育について、保護者支援についてなどの課題を決めて取り組んできています。

五歳児部会では、特別支援学校の

先生の話聞いて、保育園でできることを考えたり、一歳児部会では、職場や保護者とのコミュニケーションを考えようと医師を招いての講座を実施したり、どんな遊びをしているかを交流したりしてきました。また、会場を市内各園で行っています

が、改築後の特徴のある園舎の見学も併せてできました。参加者も、「園の活動を知れて参考になった」「食育と体づくりをつなげて取り組みたい」などの声がかれました。

講師を招いての講演会や講習会も毎年実施していますが、テーマも「子どもの発達と食育」(講師・堂原映子管理栄養士さん)、「さくらさくらんぼのリズム講習会」(講師・深野静子さん)、「音楽を通じて心の健康を」(清泉短大・山崎浩さん)・という職員がリフレッシュすることを目的に実施したり、「たにぞうさんと歌って楽しく手遊び・体遊び」など、職員が楽しみにしながら学ぶ内容も実施してきました。

また、保育士が子どもたちに運動

を指導できるようにと、長野体育指導センターの協力もいただき、各園で年に二回ずつ体育指導に来てもらっています。プールでの水遊びであったり、マット運動・跳び箱・縄跳びなど、各園で、希望する内容を行っています。こうした指導も費用

が掛かるのですが、須坂市保育園保護者会連合会(保護者組織)や須坂市からも費用の一部を負担していただき成り立っています。子どもたちの活動にいかしてもらえらると、保護者の皆さんも応援してくれています。こうした指導の中、「プールでの年齢ごとの遊び方を知れた」「水との親しみ方を知れた」などの感想がありました。

そして、もう一つは視察研修です。園舎の改修が進んでいる時期には、新しく改修された保育園や特色のある活動に取り組む保育園、認定子ども園などを視察してきました。そうした中で、各園での園舎の改修の際、設計に生かされてきていると思えます。昨年度より、特別支援について考えていこうということで、須坂支援学校・須坂市東部児童センター・稲荷山養護学校・須坂市内にある親子通園施設くれよんと障がい児の放課後デイサービスに取り組むみんな

のムム・長野市のにじいろキッズらいふを視察しました。視察を終え、「子どもたちの療育施設も多様化していて、これほどの施設があることがわかり、今後の活動に参考になった」などの感想が聞かれました。

保育士をはじめとして職員の業務量も増し、処遇の改善も必要となっていますが、こうした中でも、身近な地域の人たちが集まり、お互い刺激しあい、力を合わせて、一人一人の力量を高めていくことが大切ではないかと思えます。各園でもそれぞれが工夫して研修を行っていく上でも、情報交換も大切になってくるのではないかと思います。

また、こうした研修を積み重ねていく上でも、市町村・県の行政、保護者の協力が何より必要かと思えます。私たちも須坂市担当課をはじめとした行政機関と、保護者とも協力しながら子育てに生かすことができよう、職員一人一人が意識的に取り組みができるよう、また経験と積み重ねができるように取り組んでいきたいと思えます。子どもたちが自ら体を動かすことが好きになり、自分で考えて行動できるように育っていきけるよう援助できればと考えます。



県保育研究大会
スナツプ



◎4歳児のT君は時々うさぎにエサを持つてきてくれます。

T君「先生、耳のパン持ってきたよ」
保「ありがとーうさぎさんはパンの耳、大好きなんだよ」
パンの耳にはT君の歯形がしっかりとついているのです。

◎3歳児のKちゃんが、給食の春雨スープを食べて一言。

「春雨って、ツルツルしてキラキラしてかわいいね。食べたら、キラキラ美人になっちゃう」

3歳児
空を見上げて 飛行機雲が出来ているのを見て：

A子「せんせい ひこうきが しろい おえかき しているねえ」

4歳児
散歩に行き、家の庭にキウイフルーツが実っているのをみつけると

B男「せんせい ほくね キウイ たべられないんだよ。たべると エネルギー でちゃうんだあー」

保育士「えっ？ それ もしかしたら アレルギーのこと？」

K君が年少組だった時のつぶやき（今はもう立派な小学生のK君です）

K君「保育園で、お昼寝があつておやつがあつて、いいところだあ〜」

職員室の流し台や冷蔵庫を見て

K君「へえ〜っ。先生んちの台所こうなんだね！」

編集後記

こんなに地域に大切にされている園があるだろうか。そんなことを思いながら、日々保育をしています。春、畑作業をしていたおばさんから「雨が降ってきたが、散歩をしていた子どもたちは園に戻れたか」と心配する電話があります。初夏、花壇に植えればいと花の苗を持ってきてくれるおじさんがいます。秋、朝早くから土手の草刈りをしてくれたおじさんがいます。そして菜園活動を手伝ってくれる祖父母の方々。たくさんの方々に支えられ、見守られている安心感、心強さの中で保育をしています。

「みんなが生まれ育った地域は人と人のつながりが温かく、すてきなところなんだと子どもたちに伝えていきたい」「ふるさとを大好きになつてほしい」「自然とそんな思いが生まれてきました。私はまだこの地域のことをよく知りません。子どもたちと一緒に地域を知り、この地をもっと好きになりたいと思います。そして、地域の方々に見守られながら保育ができる喜びを職員みんなを感じ、子どもたちの健全な成長を願いながら日々の保育に取り組んでいこうと思います。」
広報委員 M